

沖縄県地域史協議会研修会

「地域史編集関係者相互の情報と資料の交換と親睦を図るとともに、史資料の発掘・収集を推進し、市町村史（誌）等の地域史づくりの発展と地域文化の振興に寄与することを目的とする」として沖縄県地域史協議会（以下、沖地協）が1978年に設立されました。現在恩納村を含め34機関が加盟しており、より良い地域史づくりを目指して、市町村史を編集する事務局や関係者で情報交換や研修会を行っています。

先日、与那原町で開催された沖地協研修会には約140人が参加しました。午前中は4コースに分かれた町内巡見があり、与那



与那原町の史跡「東名大主」

原大綱曳にまつわる資料館や御願所、集落を囲む石獅子などを見学しました。大綱曳（那覇、糸満と並ぶ三大綱引きとされている）の本番が迫っていたこともあり、いたるところで製作中の綱や旗頭、のぼり旗などが見られ、町中が活気づいていました。午後には「戦後80年の節目の中、市町村史で沖縄戦をいかに継承するか」という取り組みを紹介する研修会が行われました。

7月23日の沖縄タイムスに



与那原大綱曳資料館

「米軍が沖縄戦中に撮影した空中写真約27万枚のうち、県内では未公開の79枚の複写を琉球大学の清水肇教授（工学）が約10年かけて韓国・済州（チエジュ）大学博物館から入手」と紹介され、その清水教授が沖地協でも報告をしてくださいました。

沖縄県公文書館には、米国立公文書館などから収集した戦前の空中写真がたくさん所蔵されています。もともとは米軍が沖縄戦に向けた地図作成や偵察などに利用するために撮影した空中写真で、戦禍を受ける前の沖縄の様子が見える貴重な写真でもあります。閲覧、利用することが可能なこれらの空中写真は、市町村史や字誌などでよく使用されており、目にしたことのある方も多いかと思えます。清水教授によると、韓国の済州大学博物館には、戦中に米軍が撮影した東アジア、太平洋地域の空中写真が膨大に所蔵されており、そのうち沖縄関係の写真が約1,500枚含まれているそうです。2014年から約10年の調整を経て、清水教授は79枚の複写を入手しました。

これらの写真は撮影された地域、撮影角度などから、沖縄県公文書館などですでに公開されている写真とは異なる、新たな戦前・戦時の写真であるとのことでした。

中には低空で撮影され、屋敷囲いや家屋が並ぶ様子が鮮明に見える貴重写真もあります。今回の79枚の中には恩納村に関係する写真は見当た